

佐々木 章村（ささき・しょうそん）

1、プロフィール

歌人。山形県生まれ。父の転勤に伴い八戸に移住。病氣療養中に短歌を知り、文芸誌「露草」を創刊し、暁星会の中心になって作歌活動するが、20歳で夭折。

<生没>

1924(大正 13)年2月6日～1943(昭和 18)年9月 29 日

<代表作>

『佐々木章村歌集』

<青森との関わり>

八戸商業高校の仲間や八戸中学の若い文学愛好者と暁星会を結成。主幹となり、暁星短歌会の基礎を作った。

2、作家解説

佐々木章村は本名徳雄。大正 13 年2月6日山形県最上郡萩野村に生まれ、鉄道官吏である父の転勤に伴い八戸に移る。八戸商業高校では校内会誌に詩歌を発表する一方、柔道選手としても活躍した。昭和 15 年5月招魂祭奉納試合に風邪をおして出場した後病に倒れる。仙台鉄道病院で療養中、アララギ派の歌人岩井龍雄を知り、短歌の道を歩み出す。また信仰への目もひらかれ、1年後洗礼を受ける。

翌 16 年病氣退学した章村は自宅静養しながら、早稲田文学講義録や新聞に投稿を続け、研鑽を重ねていった。11 月八戸周辺の文学愛好者と回覧誌「露草」を創刊。17 年5月には「暁星会」を結成、章村が主幹となり、若い歌人たちを導いていった。八木田愛村、佐藤信三、山根勢五、富田末太郎ら八戸商業高校や八戸中学の仲間が集い、回覧誌「暁星」や「蜜蜂」を創刊し、活動を展開していく。なかでも章村は「讀賣歌壇」の北原白秋選や土屋文明選で度々とり上げられ、将来を期待されていたが、昭和 18 年9月 29 日、喀血のため 20 歳で急逝。

章村の夭折を悼む暁星短歌会の仲間によって昭和 24 年 12 月「佐々木章村歌集」が発刊された。遺作千数百首の中から 550 首が収録されている。また昭和 50 年には八戸東霊園に歌碑が建立され、「秋雲のかがやきゆけば吾が立てる芒の道をはろかならしむ」の歌が刻まれている。北原白秋選で天位に輝いた一首である。

昭和 16 年から 18 年までのわずか 3 年間。しかも厳しい戦時下にあって透徹した精神と豊かな感受性をもって歌を詠み続けた佐々木章村。19 歳の章村が蒔いた暁星短歌会の種子は八戸の土壤に根つき、現在に引きつがれている。

3、資料紹介

○『佐々木章村歌集』

図書

1949(昭和 24)年 12 月 5 日

185mm×128mm

章村没後 6 年目暁星短歌会により刊行された。回覧誌や新聞に投稿した遺作の中から 550 首を選び収録した。昭和 16 年 18 歳から 18 年 20 歳までの作品をまとめた唯一の歌集である。木村靄村、平塚秀雄、扇畑忠雄の序文、年譜富田末太郎の巻末記を含む。179 頁。